

「キリスト者の自由」

久しぶりに、マルチン・ルター著「キリスト者の自由」を読んだ。ずいぶん以前、日曜礼拝の後、みんなで少しずつでも読んでいこうと、それぞれに購入し、何回かは読んだ覚えがあるが、いつか立ち消えになってしまったのだろう。家の書棚に 5 冊も残っており、ふと手にとって読み始めたわけである。

この小さな小さな本には、他にもう一つの思い出がある。それこそ 20 年も前になるだろうか、四国集会で T さんが「私はこの頃、ルターの小さな本を読んでいて、いつもポケットに入れており、ほら今日もここに持っております。」と、手を高く上げて見せてくださった。そして、その内容の一部を紹介してくださり、「信仰は、たましいとキリストとを一つに結合させるので、キリストの持つておられるものは、信仰あるたましいのものとなり、たましいの持つているものはキリストのものとなる・・・ここに喜ばしい交換と、取り合いが始まる・・・とあるのですよ。信仰によって、キリストの善きものが私たちのものとなり、私たちの罪はキリストが取ってくださるのです」と、それはそれは嬉しそうに、ニコニコしながら話されたのだった。その時、本の題名は聞きのがしたのだが、その後、本屋で「キリスト者の自由」を見つけて、T さんの話された内容がそのままあったので、ああ、あの時の本はこれだったのかと分かったのであった。

この本との出会いについて長々と書いたが、今回読み返して、「信仰」と「行い」について、良く良く分かった思いがする。「救い」と「聖化」、キリストは「贖い主」であり「模範」であるということなど、何となくぼんやりしていたことが、霧が晴れるようにはっきりと見えて、T さんではないけれど「ほら、これですよ」と手を高く上げてみんなに見てもらいたい気分である。訳者が「序にかえて」に書いていることは、本当に本当だった。

ルターの「キリスト者の自由」は、彼が理解し体験した救いの真理を、当時の一般民衆に理解せしめるために書かれたものであります。従って本書は、一般の民衆が理解できるような平明な文章で書かれております。

キリスト教はもともと万民の福音であり、民衆の宗教であります。従ってその性質上分かり易

いものであり、またそうでなければなりません。・・・もちろん分かるということ、信ずると言うことはちがいますが・・・しかし、今日、キリスト教が一部少数の、いわゆるインテリと称せられる人々の宗教となり、一般の民衆には縁遠い宗教となってしまったことは、その本来の目的にそわないものであると言わなければなりません。

それには、いろいろの理由があげられましようが、第一に考えられることは、その表現・・・言葉においても、文章においても・・・がむずかしいことでもあります。むずかしいことをむずかしく語ることは、あるいはやさしいことであるかも知れませんが、むずかしい真理をやさしく、分かり易く語ることは、中々むずかしいことでもあります。そしてルターは、その著「キリスト者の自由」において、このこと、すなわち福音の真理を一般民衆にわからせることに成功したといえます。当時のドイツ民衆は、本書によって救いの真理をさと、律法の束縛から解放され、救われた者の自由と光栄を心から謳歌し喜ぶようになりました。ルターの点火した宗教改革運動は、りょう原の火のように急速に、ドイツのみならず全欧州に、ひろまるに至ったのであります。」

文庫本の大きさと、内容だけなら62p。声に出して読んでみるとちょうど70分。第一部「内なる人について」(1～18章)と第2部「外なる人について」(19～30章)の2部に分かれ、訳者がそれぞれの章にタイトルをつけてくれてあり、なお分かりやすい。

第1章は「キリスト者とはどういう人か」。

1、キリスト者は万物を支配する自由な君主であって、誰にも従属しない。

1、キリスト者は万物に奉仕する僕であって、すべての人に従属する。

なるほど、「わたしは、だれに対しても自由な者ですが、すべての人の奴隷になりました」1コリント9:19とパウロも言う。この自由と奉仕という矛盾を解き明かしつつ、「外的な行為は人間を自由にしない」、「神の言のみが真に人間を自由にする」そして「神の言とは何であるか」と続いて行く。

こんな概要を書いてみても実感にもならないので、この小さな本の中で、「なるほど！」と目を覚まされた箇所を書き写して、今月の「福音」とします。ともかく「信仰」なしに一切は虚しいのだと、思い知らされました。信仰に生きて、いつの日か「私はキリストによってこんなに満ち

足りているのだから、もう自分のためではなく、隣人のために精いっぱい生きよう」との熱い思いを日々実践できるようになれば、最高です！

第11章から わたしたちが他人を信じるのは、その人を正直で真実な人であると考えからであって、それはわたしたちが他人にあたえることのできる最も大きなほまれです。その反対に、人をだらしのない、うそつきの、軽はくな人間と考えるのは、最も大きな侮辱です。それと同様に、たましいが神の言をかたく信じる場合には、たましいは神を真実な、正しい、そして義なるお方である、とするのであって、そのことによって、たましいは神に帰することのできる最大のほまれを帰します。…その反対に、たましいが神を信じないこと以上に、神に侮辱にあたえることはありません。神を信じないことによって、たましいは神を無能な者、偽り者、頼りにならぬ者とみなし、このような不信仰をもって、できる限り神を否定し、あたかも自分の方が神よりも利口であろうとするかのように、心のうちに自分の意にかなう偶像を神に対立してこしらえあげるのです。…

第27章から 「ほんとうにわたしの神は、何のねうちもない罪せられるべき人間であるこのわたしに、何のいさおしなくして、全く価なしに、純粋なあわれみから、キリストを通じて、またキリストにおいて、すべての義と救いの満ちあふれる富を与えて下さった。だからわたしは、この後その通りであると信じることのほかは何も必要としない。ああ、このようにありあまる富を、わたしにあふれんばかりにあたえて下さったこのような父に対して、わたしもまた自由に、喜んで、何の報いも求めないで、神のおよろこびになることをしよう。そして、キリストがわたしに対してなってお下さったように、わたしも隣人に対して、一人のキリストになろう。そして、隣人に必要であり、その救いに役立つと思うこと以外は何もしないことにしよう。実際、わたしは信仰により、キリストにおいて、一切のものをじゅうぶんに持っているのだから」。